



## 2023年3月期 第3四半期決算短信〔日本基準〕（非連結）

2023年2月13日

上場会社名 株式会社フルッタフルッタ 上場取引所 東  
 コード番号 2586 URL <https://www.frutafruta.com/>  
 代表者 (役職名) 代表取締役社長執行役員CEO (氏名) 長澤 誠  
 問合せ先責任者 (役職名) 経営管理本部長 (氏名) 松永 啓太 TEL 03-6272-3190  
 四半期報告書提出予定日 2023年2月14日  
 配当支払開始予定日 -  
 四半期決算補足説明資料作成の有無：無  
 四半期決算説明会開催の有無：無

(百万円未満切捨て)

### 1. 2023年3月期第3四半期の業績（2022年4月1日～2022年12月31日）

#### (1) 経営成績（累計）

(%表示は、対前年同四半期増減率)

	売上高		営業利益		経常利益		四半期純利益	
	百万円	%	百万円	%	百万円	%	百万円	%
2023年3月期第3四半期	568	2.3	△261	—	△255	—	△255	—
2022年3月期第3四半期	555	9.1	△255	—	△257	—	△258	—

	1株当たり 四半期純利益	潜在株式調整後 1株当たり 四半期純利益
	円 銭	円 銭
2023年3月期第3四半期	△2.56	—
2022年3月期第3四半期	△14.93	—

(注) 1. 2022年3月期第3四半期累計期間及び2023年3月期第3四半期累計期間の潜在株式調整後1株当たり四半期純利益金額については、潜在株式は存在するものの1株当たり四半期純損失金額であるため記載しておりません

#### (2) 財政状態

	総資産	純資産	自己資本比率	1株当たり純資産
	百万円	百万円	%	円 銭
2023年3月期第3四半期	1,240	926	74.6	36.42
2022年3月期	1,514	1,307	86.3	49.46

(参考) 自己資本 2023年3月期第3四半期 925百万円 2022年3月期 1306百万円

### 2. 配当の状況

	年間配当金				
	第1四半期末	第2四半期末	第3四半期末	期末	合計
	円 銭	円 銭	円 銭	円 銭	円 銭
2022年3月期	—	0.00	—	0.00	0.00
2023年3月期	—	0.00	—	—	—
2023年3月期（予想）	—	—	—	0.00	0.00

(注) 直近に公表されている配当予想からの修正の有無：無

### 3. 2023年3月期の業績予想（2022年4月1日～2023年3月31日）

(%表示は、対前期増減率)

	売上高		営業利益		経常利益		当期純利益		1株当たり 当期純利益
	百万円	%	百万円	%	百万円	%	百万円	%	円 銭
通期	1,000	28.2	△300	—	△305	—	△305	—	△15.40

(注) 直近に公表されている業績予想からの修正の有無：無

※ 注記事項

(1) 四半期財務諸表の作成に特有の会計処理の適用：無

(2) 会計方針の変更・会計上の見積りの変更・修正再表示

- ① 会計基準等の改正に伴う会計方針の変更 : 無
- ② ①以外の会計方針の変更 : 無
- ③ 会計上の見積りの変更 : 無
- ④ 修正再表示 : 無

(3) 発行済株式数（普通株式）

① 期末発行済株式数（自己株式を含む）	2023年3月期3Q	30,602,329株	2022年3月期	26,406,509株
② 期末自己株式数	2023年3月期3Q	一株	2022年3月期	一株
③ 期中平均株式数（四半期累計）	2023年3月期3Q	28,458,665株	2022年3月期3Q	17,337,346株

※ 四半期決算短信は公認会計士又は監査法人の四半期レビューの対象外です

※ 業績予想の適切な利用に関する説明、その他特記事項

本資料に記載されている業績見通し等の将来に関する記述は、当社が現在入手している情報及び合理的であると判断する一定の前提に基づいており、その達成を当社として約束する趣旨のものではありません。また、実際の業績等は様々な要因により大きく異なる可能性があります。業績予想の前提となる条件及び業績予想のご利用にあたっての注意事項等については、添付資料P. 4「1. 当四半期決算に関する定性的情報（3）業績予想などの将来予測情報に関する説明」をご覧ください。

(参考) 種類株式の配当の状況

普通株式と権利関係の異なる種類株式に係る1株当たり配当金の内訳は以下のとおりであります。

A種類株式	年間配当金				
	第1四半期末	第2四半期末	第3四半期末	期末	合計
	円 銭	円 銭	円 銭	円 銭	円 銭
2021年3月期	—	0.00	—	0.00	0.00
2022年3月期	—	0.00	—		
2023年3月期(予想)				0.00	0.00

## ○添付資料の目次

1. 当四半期決算に関する定性的情報 .....	2
(1) 経営成績に関する説明 .....	2
(2) 財政状態に関する説明 .....	4
(3) 業績予想などの将来予測情報に関する説明 .....	4
2. 四半期財務諸表及び主な注記 .....	5
(1) 四半期貸借対照表 .....	5
(2) 四半期損益計算書 .....	6
第3四半期累計期間 .....	6
(3) 四半期財務諸表に関する注記事項 .....	7
(継続企業の前提に関する注記) .....	7
(株主資本の金額に著しい変動があった場合の注記) .....	7
(四半期財務諸表の作成に特有の会計処理の適用) .....	8
(会計方針の変更) .....	8
(会計上の見積りの変更) .....	8
(セグメント情報等) .....	8
(後発事象) .....	9
3. その他 .....	10
継続企業の前提に関する重要事象等 .....	10

## 1. 当四半期決算に関する定性的情報

## (1) 経営成績に関する説明

## 円安市況化での取り組み

第3四半期累計期間における当社を取り巻く環境は、引き続き円安や資源高による影響を受けながらも、前年比で増収増益となりました。主な要因として、在庫を有効活用し主力原料の輸入量を調整した一方で、アサイー需要が再拡大する中、一部商品の値上げを行いながらも、当社製品の導入を推し進められたことが、結果として円安市況における前年比での増収増益となっております。

## 業績の概要

(単位:千円)

	前第3四半期累計期間 (自 2021年4月1日 至 2021年12月31日)	当第3四半期累計期間 (自 2022年4月1日 至 2022年12月31日)	増減率
売上高	555,081	568,355	2.3%
売上原価	367,124	360,802	△1.7%
売上総利益	187,957	207,552	10.4%
販売費及び一般管理費	443,043	469,512	6.0%
営業利益	△255,086	△261,960	—
経常利益	△257,868	△255,021	—

(参考)第3四半期(10月1日-12月31日)

	前第3四半期期間 (自 2021年10月1日 至 2021年12月31日)	当第3四半期期間 (自 2022年10月1日 至 2022年12月31日)	増減率
売上高	174,011	184,761	6.2%
売上原価	117,599	113,844	△3.2%
売上総利益	56,411	70,917	25.7%
販売費及び一般管理費	157,779	152,228	△3.5%
営業利益	△101,368	△81,311	—
経常利益	△102,830	△72,699	—

当第3四半期累計期間では、売上高は568,355千円(前年同期比102.3%)、売上総利益は207,552千円(前年同期比110.4%)となり、第3四半期期間(10月-12月)においては、昨年を上回る約10,000千円(前年同期比106.2%)の売上増加及び約14,000千円(前年同期比125.7%)の売上総利益を確保することができました。費用については、前述の成長投資の継続により、67,370千円の先行投資を行いました、それを除くと70,454千円の利益改善となっております。

急激な環境変化に柔軟に対応し、魅力的な新製品や販促キャンペーンを投下したことにより第4四半期から来期にかけても、さらに成長をドライブさせるべく引き続き取り組んでおります。特に短期的には、香港発祥の台湾で人気を博しているスイーツをボトリングした新商品「楊枝甘露(ヨンジーガムロ)」を発売し、大手会員制倉庫店を中心に好調に推移しております。アサイーリバイバル戦略では、アサイーの造血機能性や抗炎症機能性は引き続き軸としつつ、盛り上がりを見ているフェムテック市場に向けて展示会などへの参加を積極的に行い、フルッタアサイーEPOFe®がFemtech Japan Award2022でブロンズ賞を受賞し、食品として唯一の受賞となるなど話題を集めています。また、研究開発に関しては、引き続きアサイーの造血機能性について研究を行っており、順調に進行しております。既存戦略では、引き続き外食チャネルが好調に推移し、アサイーの再拡大をけん引していることに加え、スムージーやゼリーなど一般食品向けの原料採用も増加傾向にあり、再拡大の傾向がさらに強まりつつあります。アグロフォレストリーGX戦略では、食品業界初の商品へのCo2削減マーク・削減量の表示した商品の準備を進めており、第4四半期には新商品の発売を予定しております。また、サステナブルな資源調達への興味・関心がより一層高まる中、今までの製造メーカー中心の取引から、小売業など他業種からの依頼を受ける機会も多くなってきており、アグロフォレストリーが注目されつつある中で、これらの時代の流れを確実に取り込み、将来のプラットフォーム化に向けて取り組んでまいります。他、各戦略を支える研究・開発面では、急激な市況変化に柔軟に対応するため、国内加工品をブラジル加工に切り替えることによるコストダウンを計画しております。

一方、販売費及び一般管理費につきましては、第3四半期期間(10月-12月)においては、約5,000千円の削減ができていたものの、前年同期で26,469千円増加しました。その主な要因は、前事業年度より取り組んでおります5カ年計画を達成するための先行投資の増加33,370千円になります。前年同期を上回ることとなりましたが、コスト削減においても約7,000千円の削減に成功しております。内訳として、物流コストとして、倉庫業者の選定や在庫消化促進により倉庫保管料が10,000千円減少しておりますが、販売促進による販促コストの増加が3,000千円あります。

結果として、第3四半期期間(10月-12月)では、営業損失は81,311千円(前年同期は営業損失101,368千円)、経常損失は、72,699千円(前年同期は102,830千円)となり、第3四半期累計期間では、営業損失は261,960千円(前年同期は営業損失255,086千円)、営業外収益として為替相場の変動により為替差益7,400千円計上しており、経常損失は255,021千円(前年同期は経常損失257,868千円)、当期純損失は255,734千円(前年同期は当期純損失258,818千円)となりました。

## セグメント別の業績

当社は輸入食品製造販売事業の単一セグメントであるため、セグメント別の記載を省略しております。事業部門別の売上高は次のとおりであります。当第3四半期会計期間より商流等を鑑み区分を変更しております。また、当第3四半期累計期間については、当期首より区分変更し、前年同期比についても同様に区分変更した上で比較しております。

### ①リテール事業

量販店では主力のフルッタアサイーシリーズを中心に採用店舗が増加しており、売上高が増加する一方で、質販店(プレミアム業態)では新型コロナウイルス感染症の反動が高単価業態に関しては逆風となり、売上高は減少いたしました。一方で、大手会員制倉庫店を中心に、前述の新商品「楊枝甘露(ヨンジーガムロ)」を発売し、売上拡大に貢献いたしました。同商品は、発売直後から多くのメディアにも取り上げられており、今後も売上の伸張が見込まれるため、他のチャネル含め今後も積極的に拡売してまいります。また、同様の台湾製造品である台湾フルーツティーの取り扱い企業が引き続き増加していることや、ココナッツヨーグルトが堅調に推移しているなど、アサイー以外の商品販売も順調に推移しております。この結果、リテール事業部門全体の売上高は、第3四半期期間(10月-12月)において12,426千円(前年同期比116%)増加し、当第3四半期累計期間において236,361千円(前年同期比98.2%)となりました。

### ②ダイレクトマーケティング(DM)事業

チャネルとして新型コロナウイルス感染症の反動減が続く中、自社ECだけでなく、大手プラットフォームへの取り組み強化を行いました。第3四半期より実施した価格改定による影響を受けた結果、売上高は横ばいという結果となりました。当社といたしましては、アサイーを中心とした健康価値に優れた原料をベースとした事業の成長において、このECチャネルでの伸びは欠かせないものだと考えており、プラットフォームでの拡売、チャネル特性に合った商品開発などを早急に進めております。前述の新商品「楊枝甘露(ヨンジーガムロ)」に関しても、ECチャネル戦略の見直しによる露出強化で、第4四半期に売上拡大に貢献する見込みであります。また、CO<sub>2</sub>削減量の可視化取り組みをさらに推進すべく、食品業界初の商品への削減マーク・削減量の表示した商品を第4四半期にEC先行にて発売を予定しております。この結果、ダイレクトマーケティング事業部門全体の売上高は、第3四半期期間(10月-12月)において261千円(前年同期比99%)減少し、当第3四半期累計期間において92,879千円(前年同期比100.1%)となりました。

### ③業務用事業

外食向け原料販売では、引き続き経済活動の活発化の追い風もあり、大手カフェチェーンやレストランチェーン向けの販売は好調に推移しておりますが、一方で個店向けの業務用通販サイトBIZWEBにおいては10月に実施した価格改定の影響もあり、伸びが鈍化する結果となりました。今後は、アサイーの従来の価値訴求に加え、代替肉をはじめとした植物性タンパク質訴求食品における血液代替原料となり得る価値の訴求や、アマゾンフルーツを活用したアプリケーション開発の強化により、新たな価値訴求を武器に展開してまいります。また、メーカー向け原料販売では、一般食品向けに関しては、大手小売業向け商品への採用なども好調に推移しておりますが、健康食品向けに関しては厳しい状況が続いております。この結果、業務用事業部門の売上高は、第3四半期期間(10月-12月)において63千円(前年同期比100.1%)増加し、当第3四半期累計期間において223,453千円(前年同期比106.3%)となりました。

## ④海外事業

海外事業部門に関しては、主力のカカオ豆が昨シーズンが豊作であったのに対し、今シーズンは現地ブラジルが天候不順に見舞われており、年度合計では昨年を上回る予定となっているものの、収穫量の減少による、売上減少が見込まれます。当社カカオビジネスはCO<sub>2</sub>削減量の観点から見ても大きな役割を担っており、引き続きCAMTAと協力しながらカカオ豆の増産に取り組んでまいります。また、全世界的な原料の不足や高騰する現状に対して、当社の特徴である現地生産者と直接繋がっているという利点を活かし、当社にしかできないソリューションを提供することで、売上拡大を図ってまいります。この結果、海外事業部門の売上高は、第3四半期期間(10月-12月)において1,479千円(前年同期比86%)減少し、当第3四半期累計期間において15,661千円(前年同期比139.5%)となりました。

## (2) 財政状態に関する説明

## ①資産、負債及び純資産の状況

当第3四半期会計期間末における総資産は、前事業年度末に比べて273,392千円減少したことで、1,240,921千円となりました。この主な要因は商品及び製品が35,273千円増えた一方、投資有価証券が124,975千円、現金および預金が168,452千円、原材料及び貯蔵品が30,842千円減少したこと等によるものであります。

当第3四半期会計期間末における負債は、前事業年度末に比べて107,317千円増加したことで、314,044千円となりました。この主な要因は買掛金が90,707千円増加したこと等によるものであります。

当第3四半期会計期間末における純資産は、前事業年度末に比べて380,710千円減少したことで、926,876千円となりました。この主な要因は四半期純損失255,731千円を計上したこと等によるものであります。

## (3) 業績予想などの将来予測情報に関する説明

業績予想については、2022年6月30日の「業績予想に関するお知らせ」のとおりでございます。

## 2. 四半期財務諸表及び主な注記

## (1) 四半期貸借対照表

(単位：千円)

	前事業年度 (2022年3月31日)	当第3四半期会計期間 (2022年12月31日)
<b>資産の部</b>		
流動資産		
現金及び預金	558,117	389,665
売掛金	92,236	83,766
商品及び製品	147,228	182,501
原材料及び貯蔵品	131,988	101,146
その他	48,156	71,930
流動資産合計	977,728	829,009
固定資産		
投資その他の資産		
投資有価証券	474,906	349,931
その他	61,678	61,981
投資その他の資産合計	536,585	411,912
固定資産合計	536,585	411,912
資産合計	1,514,313	1,240,921
<b>負債の部</b>		
流動負債		
買掛金	49,137	139,844
未払法人税等	8,353	3,259
その他	45,498	67,196
流動負債合計	102,989	210,300
固定負債		
長期借入金	100,000	100,000
資産除去債務	3,737	3,744
固定負債合計	103,737	103,744
負債合計	206,727	314,044
<b>純資産の部</b>		
株主資本		
資本金	970,157	970,157
資本剰余金	1,097,114	1,097,114
利益剰余金	△609,218	△864,952
株主資本合計	1,458,054	1,202,319
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	△151,957	△276,932
評価・換算差額等合計	△151,957	△276,932
新株予約権	1,489	1,489
純資産合計	1,307,586	926,876
負債純資産合計	1,514,313	1,240,921



(2) 四半期損益計算書  
(第3四半期累計期間)

(単位：千円)

	前第3四半期累計期間 (自 2021年4月1日 至 2021年12月31日)	当第3四半期累計期間 (自 2022年4月1日 至 2022年12月31日)
売上高	555,081	568,355
売上原価	367,124	360,802
売上総利益	187,957	207,552
販売費及び一般管理費	443,043	469,512
営業損失(△)	△255,086	△261,960
営業外収益		
受取利息	2	4
受取手数料	211	—
為替差益	—	7,400
助成金収入	9,190	—
その他	121	527
営業外収益合計	9,526	7,931
営業外費用		
支払利息	591	753
為替差損	7,302	—
資金調達費用	4,415	240
営業外費用合計	12,309	993
経常損失(△)	△257,868	△255,021
特別利益		
固定資産売却益	70	—
特別利益合計	70	—
税引前四半期純損失(△)	△257,798	△255,021
法人税、住民税及び事業税	1,019	712
四半期純損失(△)	△258,818	△255,734

## (3) 四半期財務諸表に関する注記事項

## (継続企業の前提に関する注記)

当社は、継続して営業損失、経常損失、当期純損失及び営業キャッシュ・フローのマイナスを計上しております

当第3四半期累計期間においても営業損失261,960千円、経常損失255,021千円及び四半期純損失255,734千円を計上しております。

これらの状況により、継続企業の前提に関する重要な疑義を生じさせるような事象又は状況が存在しております。

今後、当社は以下の対応策を講じ、当該状況の改善及び解消に努めてまいります。

## i. 健康価値に優れた原料をベースとした事業

アサイーが持つ可能性を科学的に探究し、価値向上を促進させるため、機能性研究を更に深めてまいります。それに加えて、現在外食チャネルを中心に盛り上がりの兆しが見えている要因にもあります、アサイーが持っている本来の価値を再度見つめ直すことにより、既存チャネルにおいてもベースアップを図ってまいります。

## ii. 環境再生型のESG事業 / 自然と経済を両立させるビジネスモデル (自然資本主義)

CO<sub>2</sub>削減の可視化に向けて、先行して実施しております自社EC、カカオ豆の事例に続き、この取り組みを当社の事業全体に広めるべく、事業軸、商品軸から強化を図ると共に、その成果を素早くIRという形でステークホルダーのみならず発信できる体制を構築してまいります。また、サプライヤーであるCAMTAにおいても、現在JICAからの支援を受け、設備を強化しております。FSSC22000安全基準に基づき、搾汁機の更新やアイス・加工品の生産ライン充実させ、供給力の強化を図ることで、CO<sub>2</sub>削減量の増加に貢献してまいります。

## iii. 黒字化への取り組み

当社の財務状況は、資金調達によるキャッシュ・フローの改善、および売上拡大による在庫状況の改善により、全社的に改善傾向にあります。さらに、昨年からのスタートしております5か年計画に基づき、早期黒字化に向けた売上の拡大および粗利率の改善を進めてまいります。売上拡大に関しては、アサイーの健康価値を軸に、チャネル、商品の両方向から新領域へチャレンジを積極的に行うことにより、新たな売上を創出してまいります。粗利率の改善に関しては、引き続き物価上昇の傾向が続く中ではありますが、商品構成の見直しによる粗利ミックスにより、改善を図ってまいります。

リテール事業部門においては、引き続き小売業を中心とした市場の動向が見通せない中、アサイーの機能性訴求や、常温商品（フリーズドライパウダー、常温飲料）など、お客様のニーズに合わせた提案や商品を展開することにより、市場動向に左右されないオンリーワンの価値を提供してまいります。

DM事業部門においては、引き続き大手プラットフォームへの進出、取り組み強化を図り、今まで自社ECでは取り込めていなかった層へのアプローチを引き続き強化します。

業務用事業部門においては、現在盛り上がりを見せている外食チャネルの勢いを、他のチャネルの起爆剤とすべく、アサイーが持つ本来の価値やおいしさを中心としたメニュー提案を強化し、他チャネルへ水平展開してまいります。小売業へメーカー向け原料販売においても、今期よりアサイーの機能性をベースとした提案を強化しており、その刈り取りに向けた商談を強化してまいります。

海外事業部門においては、今シーズンのカカオ豆収穫、出荷がはじまる時期となっており、昨シーズン同様、生産量の増加と安定供給を目標として、サプライヤーのCAMTAと協力して進めると共に、引き続きCO<sub>2</sub>削減量の増加に貢献してまいります。

以上の施策を実施するとともに、今後も引き続き有効と考えられる施策につきましては、積極的に実施してまいります。

しかしながら、今後の利益体質への変革を目指した、売上や収益性の改善のための施策の効果には一定程度の時間を要し、今後の経済環境にも左右されることから、現時点では継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められます。

なお、当社の財務諸表は継続企業を前提として作成しており、継続企業の前提に関する重要な不確実性の影響は財務諸表に反映しておりません。

## (株主資本の金額に著しい変動があった場合の注記)

該当事項はありません。

(四半期財務諸表の作成に特有の会計処理の適用)

該当事項はありません。

(会計方針の変更)

(時価の算定に関する会計基準等の適用)

「時価の算定に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第31号 2021年6月17日。以下「時価算定会計基準適用指針」という。)を当第1四半期会計期間の期首から適用し、時価算定会計基準適用指針第27-2項に定める経過的な取扱いに従って、時価算定会計基準適用指針が定める新たな会計方針を将来にわたって適用することといたしました。なお、これによる四半期財務諸表への影響はありません。

(会計上の見積りの変更)

該当事項はありません。

(セグメント情報等)

**【セグメント情報】**

I 前第3四半期累計期間(自 2021年4月1日 至 2021年12月31日)

当社は、輸入食品製造販売事業の単一セグメントであるため、記載を省略しております。

II 当第3四半期累計期間(自 2022年4月1日 至 2022年12月31日)

当社は、輸入食品製造販売事業の単一セグメントであるため、記載を省略しております。

(後発事象)

該当事項はありません

### 3. その他

#### 継続企業の前提に関する重要事象等

当社は、前事業年度末において、継続して営業損失、経常損失、当期純損失及び営業キャッシュ・フローのマイナスを計上しております。

当第3四半期累計期間においても営業損失255,086千円、経常損失257,868千円及び四半期純損失258,818千円を計上しております。

これらの状況により、継続企業の前提に関する重要な疑義を生じさせるような事象又は状況が存在しております。

当該事象又は状況を改善、解消するための対応策として下記の項目について取り組んでおります。

①リテール事業

フルッタアサイーカートカンの再販により販売拡大に取り組んでまいります。

②AFM事業

食品メーカーや外食産業等へのアサイーの原材料及び商品の販売強化に取り組んでまいります。

③DM事業

サプリメント等の機能性商材の開発及び定期顧客獲得による売上拡大に取り組んでまいります。

④プロモーションイベント開催

プロモーション活動による、アサイーの再認知及び動機付けによる販促活動に取り組んでまいります。

⑤海外事業展開への取り組み

アジア地域でのアサイー及びアマゾンフルーツ等の原材料販売に取り組んでまいります。

⑥機能性分析への取り組み

機能性分析による消費者への訴求及び動機付けに起因した売上拡大に取り組んでまいります。

⑦財務基盤の安定化について

アサイー原材料の資金化と新規取組みで利益改善を図るとともに、新株予約権の行使等も含めた資本政策により財務基盤安定に取り組んでまいります。

当社は、これら事象を解消するため、各施策に取り組むものの、現時点においては継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められると判断致しております。